

和歌の言葉遊び

吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を あらしといふらむ
文屋康秀

(現代訳) : 山からの風が吹くとたちまち秋の草木がしおれてしま
うので、なるほどそれで山から吹く風を嵐というのです
ね。

百人一首の中で、秋の歌は、恋の歌43首に次いで多い16首で、
作者はすべて男性です。秋という季節には、詩情をかき立てる魅力が
あるのでしょうか。

文屋康秀は、六歌仙の一人です。「六歌仙」とは、紀貫之が『古今
和歌集』の序文で歌の名人と認めた6人のことです。文屋康秀が、三
河の国(愛知県)の役人として赴任する時、同じく六歌仙の一人であ
る小野小町に「一緒に行かないか」と誘ったところ、小野小町から
「往なむ(「否む」との掛詞)」「(私が行くと思う?)」という和歌を
もらい、あっさり振られてしまったというエピソードがあります。

上記の和歌、「山+風」=「嵐」という言葉遊びが取り入れられて
います。日本語の雅な言葉遊びも、現代の私たちから見ると「おやじ
ギャグ」のようにも感じますね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ